
気文 - キブン -

綾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気文・キブン・

【Nコード】

N4268S

【作者名】

綾

【あらすじ】

その時その時で想ったものを文字に。

なので視点や表し方はその話毎でこととなります。

エッセイに近い？

幼稚と思えるかもしれませんが、ご了承ください。

たまに思うことがあるんです。

私のココロの器がはつきりと分かるようにちよつとした些細なことでストレスが貯まってしまふのか。

憧れがあるんです。

何があっても動じない、広いココロの持ち主に、その人に会って聴いてみたい、「あなたは私とどこが違うのか」

でももしかしたら答えは単純かつ明解かも、

「こんな空の下でそんなことを気にしている君は、自分がちっぽけに感じないか？一言一言君にとっては聞き漏らしてはいけなくらい大切な言葉かも知れないが、時には流してみたらどうだろうか、空は何も言わないし伝えては来ないだろうけど、その上にいるかも知れない「神」に愚痴る気持ちでいればいい。空はこんなにも碧く広いのだからそんなことでは黒く染まってしまうことはないし自分もそんな空になりたいと思える時が来たらココロの器なんて必要なくなるだろう」

これはあくまで自分の妄想であり、今一番必要としているからこそ出てきた“奇麗な言葉”だ。だからこそ現実を私は見れていない。

2 (前書き)

2000 いてない載せられないのか！ってことで足しました。

2

晴天の下でたくさんの日差しを受けながら高く大きくなりたくて、
ずっと上を見続けてきた。何にも負けたくないと心もち、ここま
でやって来た。今自分は頑張ってきたからこそ大きくて誰にも負け
ない誰かが認める綺麗な花を咲かせられたんだ。

心で負けていたら何にも勝てないから、やる前から放棄せずみんな
頑張っているんです！評価するのは自分自身！

右手に心、左手に信

身を軸に世界はまわり

自分の時間が動き始める

どこをみても自分はシンで成っている。

3

足元を歩いて行く蟻の列、自分にとってはとてもちっぽけに見える奴ら、そんな奴らでも今を生き抜くために必死なんだろうな。ヘタすると自分よりも生き生きしているかも知れないよ。笑っちゃよな、生きている意味が見つかなくて、何もしようもない自分と、考える暇もないくらい忙しい毎日を送って生き生きしている蟻、なんてな。だからと言ってそんなあこがれはなんにもならないから精一杯生きていくしかないんだな。負けるな。オレ

分かり合う。それって一方通行じゃダメだよ。分かって欲しいことが在っても、それがなかなかうまく伝わらなくても、イラついたり、投げやりにする事は、「分かり合えなかった」ということじゃなくて、一方通行に相手を傷つけ、自分にも良いことは何もない。自分と相手は全く違う人間だっていうことを考えて！

そして、もし分かり合いが出来なくて突き放されたような暗い気持ちになっても心を広く持って欲しいです！対等といえる人は必ず近くにいるからね

聞こえていますか、自分の足音が…消えていませんか、自分の足跡が…大切なモノは、なんですか…それを追っているのですか、捜しているのですか…

見えていないんですね…歩くのは止めることが出来ませんか…後ろを振り返ったりしないんですか…前に進むことが全てではないでしょうか。

…止まりなさい。

…止まって。

…止まって下さい。お願いだから足元を見て、見えた？

犠牲にされてきたモノの悲しみが、あなたをずっと待ち続けていたワタシの思いが…

足に絡まり付いて、絡まり付いて動きを鈍くさせ、最後には動かなくさせる。

あなたは見た、見るという行動に出てくれた。ワタシは嬉しいの、でもあなたは嘆くのかしらね？

苦しみと悲しみと悔やみと恨みと…

絡まり付いたのはあなたのせい、大切なモノがよく分からないという心の穴が埋めてくれるモノを欲しがっていた。人は…あなたはとても弱いイキモノなの、ワタシがいつでも隣に居たのに…気づくことは無かった…

あなたを呪うような感情ではないのよ。

ああ、わたしはもうあなた…

急に飛び立った鳥達が、騒がしくせわしく大空を舞っている。私は見つめる。私はあそこへは行けない、翼がない：そうじゃない。私には翼があっても行けない。私は独り。私は自由。私は…。

独りにはなりたくなかった、ちゃんと努力もした。でもダメだった。私が悪かったのかも知れない。でも、無理に合わせないと繋がりが切れる様な関係は、要らなかったから…。

そのせいじゃないかと私は思う。翼があったって、言葉があったって。私は独り…。

名前が呼ばれる、私は空想を止める。

私はまだ諦めない。

自分に負けを認めさせない、だって17、表に出なくちゃ、負けてられない！

自分はなぜこんな平凡な退屈な世界にいるのか、そんなことを思い始めたのはいつからだっただろうか……。世界は広いのに、なぜ自分はこの場所でこの両親の元に生まれたのか……。次々と疑問は、浮かび上がっては解決することなく消えていく。ひとつひとつにあまり重要正はない。こんな言葉を聞いたことがある？、大切なモノは無くしてから気づく……。有り得ない、理解したくない。だっておかしいよ……。それが大切だと思ってもいなかったのに……。そこにあるのが当たり前だったものが突然消えて、心にぽっかり穴が空いたって、そっか、これが寂しいって言うものなのか……。なんて思わないし、なくすかも知れないときに、無くしてからじゃ遅いの！。と言われたところで危機感なんて湧かないよ……

そんなことって、どうでも良いよね。何となく思っただけだから……。同意は求めてない……。むしろ否定して欲しかったりね……

8↓9 (前書き)

後書きのほうに200字いかなかったものをくっつけました。

よかったらそれどうぞ (・
|・
)

いつもの通り慣れた道をいつものように通っていたら、ふと、いつもとは違うことに気付いた。いや、今更になって気付いたようだった。ここに信号機はあったろうか。ここは田んぼが広がっていたはずなのに、いつの間に見とろしが悪くなったんだっけか、と。確かに昔はそこであって、何も感じず、あったのに。形が変わっていくのを見ていたはずなのに。何気ない日常の変化に、取り留めない思いが溢れる。

そうか、街と共にこんなに年を取ったんだ、と。何気なく気付いた日でもあった。

8↓9 (後書き)

気分は、晴れ。周りは、夕焼け。私は、独り。音が聞こえる、紅のランプを光らせながら。私は、わらう。心から。祝う者はいない。非難する者もない。私は、独り。朱い水の上。

そして私も、赤い水へ…

沢山の人がいて、自分の知らないの人もいて、世界の時間が動いてる。だから、人の死はちっぽけで、そんなちっぽけに耐えられない自分は、世界にとってもちっぽけ。でも、そんな自分にも代わりはいないから、世界単位で見なければ自分はある意味偉大かも。自分が死んで悲しむ人はいるだろうか。テレビで何度も見たことあるのに、葬儀に立つと涙が止まらないのはなぜだろう。自分は何の役にも立たず、ただ能能と生きている。世界で‘生きたい’と思っている人は何人いて、世界で‘死にたい’と思っている人は何人いるか、そう思考出来ることは幸せなのに、そのことさえも気付かないで、可哀想などと思うことは、罪だ。人は生きているから思考でき、生きていくから死にたいと思うのだ。それは幸せなこと。

あなたにとって、世界はなんだ、生きるとは何？

11

待っていた日は永遠に來ない。

待っている日など存在しないから。

待っていて、と思う相手は居たけれど。

言葉に出すこともなく…

後悔などしていない。

それは嘘…いや、本当？

心の在処はどことも知れず。

言っておけばと、今さらに。

こんなことになるなんて。

自分がそうだったら…

何度思っただろう。

この声は届かない

この想いは届かない

この手は届かない

空を切るばかり。

あれ

ほんとにいまさら

なにかがあふれて

おかしいな…

こんなはずじゃなかったのに

どこにもあなたはイナイなんて

12

必死に努力している君がいる。ちゃんと知ってる僕がいる。それだけで世界は成り立つ。

夢みたいなこと、でも現実。何かに逃避してもなにもかわらず。一時的な行動は何にもならない。

知っている、だから一言

『愛している、今の君をいつまでも』

重いかそんなふうに思うだろうか。君ならそうかも
少し自嘲気味に笑った僕を視る君が思い浮かんで、結局この言葉は
発せられることなく消えていく。

世界が成り立つ
想いがあるから
心があるから
僕にとってはそれで十分なんだ。

がんばれ

言葉にはしないから
そのままの夢を追う君のまま

楽しさって、人生そのもの？

悩みなんてオードックスなものを除けば、ばらばら？

すべてにおいて個人差が有るってこと。

個性 || personality

英語使うとなんかっこ良くない？

人生は山あり谷ありっていうのも、その大きさは十人十色ってやつ。

まっ！言いたいことを簡潔にするなら：

人に頼るといふ行動を信じたら危ないよ

ってことさ。

気付いてないだけ自分を良く知ってるの

只視てないだけ自分のことを

長所短所、どうして長いのが良くて短いのが悪いところってとらえるんだらう？

別に短所だってただの苦手なことと同義じゃないのかな？

人の捉え方も様々だよね。

慣習なんてぶち壊せ！

誰かが確かに言ったんだ。

「誰かに好きになってもらいたいのなら、まず自分を好きにならないと」って。

知らない知らない知らない、

確かにそうなのかもと思った自分も、そんな偽善ぶった自分に嫌気がさしたのも、ふざけてるのかって相手に対して思ったことも、好きという意味も。

知らない知らない知らない知らない知りたくない。

あまのじゃくと言われても、素直じゃないと言われても、これが自分で、

ひとつの問いに何通りの答えがあるのか、自分の出した答えを誰かに言ったら顔を歪めるだろうか、自分は間違っているのか。

正しいってなに、正解ってなに、答えってあるの、考えるのもバカらしい。

だから自分は、

「と。」

×

あなたがいてくれたら

たとえあえるじかんがなくとも
めーるをおくれば

たまにでもかえしてくれるなら
そんなかんけいでいいから

あなたがこのせかいにいてくれたら

それだけでわたしはかまわないのに

あなたをおもうことをゆるしてくれますか

送らないメール
送れないメール

みとめるしかないのは知っている

さいごにあったのはいつだったか

返らないメール
繋がらないメール

いつまでもわすれない
そんな

かつこつけたことばはいえないいまをかんがえるだけで
よゆうなんてものはないから

それでもふとおもいだす

そんなときがあること

それだけはゆるしてください

涙は勝手に流れる

あなたにおもいをむけるから

あなたは

だから

15

かわる、かわる
わたしを写して
青から赤へそして黒へ
時には灰色そして黒

かわる、かわるの
わたしの世界は
たくさん溢れて
毎日、毎日

寂しいなんて思わない
退屈なんて感じない
することなすこと
変わりはないけど

緑と一緒にシャボン玉
増えたり減ったり
消えた後はどこに行く

分からない答え
それを毎日考える
毎日、毎日

違う答えが浮かんでくるから
わたしの記憶に残らないから
飽きたりしないの

わたしは一人
わたしの色は
青、赤、灰色、黒
もっともっと増えたりするの

あなたの目では
わたしは何色

決まった時間にやってくる
聞きたい答えは得られない

わたしに声はないから
あなたとは違うから

願い事はただひとつ
最期の時が

あなたの目には
あの変わる色のように
きれいなわたしを
焼き付けて

地〔シタ〕には還らず
どうか天〔ウエ〕に

あの色の一部になりたい

そんなことを

毎日、毎日
思っては
忘れます

紅い花のように
散りゆくその日まで

「わたしはあなたから金魚と呼ばれる

16

私は人を壊したかった

僕は人を殺したかった

ただそれだけなのに

誰も理解なんてしない
話なんて聞かない

一人が嫌で
独りは怖くて

合わせているだけ

本心なんてどこにもない
表面だけの感情

私の頭は正常だ

僕の心は異常だ

理解なんて必要ない

私は私で
僕は僕で

そして出会った

私 僕

私はあなたの枷を壊した

僕は君の心を殺した

そして終わる

すべての世界誰もいない

音が消え

時間は止まり

無が続く

光はあるのに闇はなく

月はあるのに陽はない

巡らない

それが自分達

いつも隣にいるのが当たり前
笑顔を向けてくれるのが当たり前だった

そんな当たり前な日常に戻れたらどれだけいいだろうか
気づいたら君は居なくて
気づいたときにはもう遅くて

こんなことが分かっていたら
毎日を大切にしようと努力したかもしれないのに

いや、分かっていたら
その日が来ないことを祈って
その日が来ることを恐れて
僕は動けなくなっていたかもしれない

ついさっきだ

今日の晩御飯なにがいいかな？

無邪気に僕のとなりで笑っていた
今日と言う日に限って疲れていた僕は適当に返して君に背を向けた

誰がこんなことを想定したか
僕の背で君は何を思ったか
どんな顔をしていたか

なにも知らなかった

なにも知ってあげなかった

君の最後は綺麗で

やっぱり僕は君に惚れて

そして好きになって愛したんだ

温もりが欲しくて

君に触れて

そして後悔した。

全て終わってしまったんだ

君の心臓ーココローも

僕の恋心ーココローも

涙を流すのは僕だけだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4268s/>

気文 - キブン -

2011年10月8日14時41分発行